

幼小連携を考慮した音楽指導における ピアノ伴奏の工夫とその指導 —小学校低学年の音楽教材の分析から—

Piano Accompaniment Ideas and their Instruction in Music Instruction that Takes
the Coordination between Kindergarten and Elementary School into Account:
From an Analysis of Elementary School Music Teaching Materials
for Lower Grades

丸 林 実千代¹⁾
MARUBAYASHI Michiyo
佐 藤 千 佳²⁾
SATO Chika

[Abstract] This paper investigated and examined—at the level of teaching material research—the coordination between kindergarten and elementary school in music instruction, because of the reason that music teaching materials from the lower grades of elementary schools are also often used in kindergarten and nursery schools. Also, piano accompaniments were adopted from the standpoint of teacher and caregiver training, and an analysis of teaching materials, an examination of easy accompaniments, and ideas for the instruction of these were discussed based on the thinking that code names are beneficial in piano accompaniments for beginners.

The choral teaching material printed in the current textbook (KYOUGEI MUSIC PUBLISHERS) for the lower grades (1st and 2nd grades) of elementary school is 72 songs. First, the tonality, rhythm, and timing of all of these songs were analyzed. After that, the author examined code name accompaniments in each stage, and also examined points for the instruction of each of those. Specifically, the following were created and presented: ① accompaniments of only the root of the code name, ② accompaniments in basic forms, ③ accompaniments that included inversions, ④ accompaniments in arpeggios, and ⑤ accompaniments combined with musical motifs or the lyrics of a song. Furthermore, an investigation into rhythm instruction was also added. This way of comprehending the music teaching materials of the lower grades of elementary school as well as putting the focus as far as kindergarten and nursery school will likely be one clue for considering the future coordination between kindergarten and elementary school in music education.

1. はじめに：本論文の視点

幼小連携に関する研究や実践は、1998年告示の『幼稚園教育要領』と『小学校学習指導要領』

1) 日本女子大学人間社会学部教育学科准教授

2) 日本女子大学人間社会学部教育学科非常勤助手

において、その必要性が指摘された以降、多くの蓄積がなされてきている。その動向について文部科学省は「まず、幼児・児童の交流からはじまり、次に、教員同士の研修がチーム・ティーチング、人事交流が行われ、最後に教育課程が編成されるという流れになっている」(文部科学省、議事録、2004)とし、その研究の最終段階が教育課程の編成になっていることを指摘していた。そしてその後、2008年に『幼稚園教育要領』および『小学校指導要領』が改訂され、幼小連携についてさらに踏み込んだ表現が示されたことにより、さらに多くの研究の蓄積がなされている。

音楽教育においてもさまざまな取り組みがなされてきているが、それらは上記の指摘のように教育課程(カリキュラム)編成に関する研究が多くみられる。例えば、三村氏他による広島大学の附属校園との複数年にわたる共同研究などである(2008、2009、2010)。ここでは子どもの歌唱能力に着目し、そこから教育課程(カリキュラム)編成について考察されている。これらの先行研究を踏まえ、本論文ではあえて教材に焦点化し検討を行いたいと思う。なぜならば、小学校低学年の教材は幼稚園(および保育所)でも扱われることが多く、幼小双方の共通点となっているからである。このように教材研究レベルで考察を試みるのが本論文の第1の視点である。

そして、音楽における小学校教員養成と保育者養成を第2の視点としたい。これを取り上げる理由は以下に詳述するが、音楽教材を実際の指導に展開させる際、その指導場面の質は教師の資質・能力に大きく左右される。そのための指導者の資質・能力の育成について、幼小連携の観点から考察を行いたい。

さらに上記との関連で、教材を実際に扱う場面の中から、今回はピアノ伴奏を中心に検討することが第3の視点である。小学校教員養成と保育者養成においてピアノ伴奏力の習得は、古くからの大きな課題であり、今日においても簡易伴奏の開発などさまざまな試みがなされている。

以上の3つの視点に基づき、本論文では音楽教育における幼小連携について論じていくことにする。

2. ピアノ伴奏指導に対する見地と、本論文の目的および方法

(1) 教員養成・保育者養成におけるピアノ指導に対する筆者の見地

教員養成、保育者養成におけるピアノ初心者にとって、弾き歌い奏はハードルが高く感じられるものである。そもそもピアノという楽器の習得は、長年地道に訓練を重ね、少しずつ上達していくといった道筋をたどっていくものである。しかし教員養成、保育者養成における現状では、限られた時間である程度のレベルで演奏できるようにしないといけない。そのため、簡易伴奏譜というものが無くてはならないものになってきているように思う。

昨今、幼稚園、保育園用の弾き歌い伴奏譜は数多く出版されており、これらは本格伴奏譜と比較すると簡易なものである。これら弾き歌い伴奏譜には、ピアノ初心者にも弾けるように音名が記載されているものが多い。小学校用の伴奏譜においては、本格伴奏譜のみならず簡易伴奏譜も掲載されている。そのうち小学校1、2年の教科書に掲載されている楽曲は全部で72曲¹⁾あり、その多くは、数多ある幼稚園、保育園用の楽譜にも掲載されている。このことは、小学校低学年で歌われる楽曲は、幼稚園、保育園で歌われる楽曲と共通することを裏付けている。つまり、小学校1、2年の教科書に掲載されている楽曲を習得すれば、幼稚園、保育園における弾き歌いにも対応できることになるのではないであろうか。

簡易伴奏譜においても演奏が困難な学生の場合、指導者が楽曲内の和音に基づき、さらに簡易に編曲をして演奏をさせることもある。指導者は、長年の経験のもと伴奏譜を編曲できてしまうが、初心者が自力で伴奏譜を編曲しようとした場合、困難が生じることになるであろう。

簡易伴奏譜においても演奏困難なピアノ初心者にとって、指針になるのがコードネームである。和音機能についての知識が少なくとも、コードネームに則って演奏することで、簡易な伴奏からより複雑な伴奏まで幅広く対応できる。必ずしも譜面どおりに演奏する必要はなく、楽譜の読譜が苦手の学習者にとっても、対応しやすいのではないであろうか。

(2) 先行研究の検討

音楽教育における幼小連携に関する先行研究は、上記の「はじめに」の部分で触れたため、ここでは省略し、以下にピアノ伴奏を中心に本論文に関係する先行研究について簡単に検討を行う。

教員養成、保育者養成におけるピアノ伴奏についての先行研究は数多くあり、そのうち和音機能について、もしくはコードネームについて論じられているもの、楽曲を数曲例に出し、その伴奏の可能性を論じたもの、伴奏法をカテゴリー別に分類し紹介したものなどがあつた。また、小学校の共通教材を例に指導法を模索したものもあつた（例えば、小笠原 2007、池之内 2014、成川 2016、など）。

しかし音楽専科でない小学校教諭が指導しなければならない小学校低学年、つまり小学校 1、2 年生の楽曲すべてを分析したものは見あたらなかった。

前述したように、小学校 1、2 年の教科書に掲載されている楽曲の多くは、数多ある幼稚園、保育園用の楽譜にも掲載されている。これら全楽曲を分析し、段階を経たコードネーム伴奏指導法を考察すれば、幼小ともに対応できる弾き歌い伴奏が可能になるのではないであろうか。

(3) 本論文の目的

本論文では、音楽教育における幼小連携について教材研究レベルで考察を行うために、小学校 1、2 年の楽曲に使用されている教材を分析し、そこから段階的なコードネームによるピアノ伴奏の提案を行い、その指導方法について検討を行う。

(4) 研究の方法

教育芸術社出版の『小学生のおんがく 1 指導書伴奏編』および『小学生の音楽 2 指導書伴奏編』に掲載されている楽曲を取り上げ、調性、リズム、拍子を分析する。次に、その分析結果をもとにコードネーム伴奏法をレベル別に提案する。そこから、幼小ともに対応できる段階を踏んだ弾き歌い指導について考察を加える。

なお、教員養成、保育者養成においてのピアノ初心者は、右手は楽曲の旋律を、左手で伴奏を演奏するほうが、歌唱と右手が一致してより楽に演奏できるようである。そこで本論文では左手伴奏を主とした。なお、音名は英語表記とし、高さが特定されない場合は大文字表記とした。

3. 小学校低学年の音楽教材分析と伴奏法の提案、指導のポイント

(1) 調性

小学校1、2年の楽曲72曲の調性の分布は次のようになった²⁾。

表1 『小学生のおんがく1指導書伴奏編』の楽曲の調性の分布(多い順)

調性	調号	曲数
ハ長調	なし	18曲
ヘ長調	b 1個	12曲
ニ長調	# 2個	5曲
調性なし(わらべ歌)	なし	2曲
ト長調	# 1個	1曲
ハ短調	b 3個	1曲
		計39曲

表2 『小学生の音楽2指導書伴奏編』の楽曲の調性の分布(多い順)

調性	調号	曲数
ハ長調	なし	20曲
ヘ長調	b 1個	7曲
ト長調	# 1個	2曲
ニ長調	# 2個	1曲
ト短調(わらべ歌)	b 2個	1曲
調性なし(わらべ歌)	なし	1曲
調性なし(その他)	なし	1曲
		計33曲

表3 表1と表2の合計

調性	調号	曲数
ハ長調	なし	38曲
ヘ長調	b 1個	19曲
ニ長調	# 2個	6曲
ト長調	# 1個	3曲
調性なし(わらべ歌)	なし	3曲
調性なし(その他)	なし	1曲
ハ短調	b 3個	1曲
ト短調(わらべ歌)	b 2個	1曲
		合計72曲

このうち「調性なし(わらべ歌)」としたものは、イ短調で掲載されているが、コードネーム表記は無い。「ト短調(わらべ歌)」とした楽曲は、「ずいずいずっころばし」であるが、こちらも同様にコードネーム表記は無い。

上記の表から見てとれるのは、調号が少ない調性の楽曲が数多くみられるということである。

黒鍵がやや多いかと思われる調号が3つある調の楽曲は、ハ短調の楽曲1曲のみであるが、これは「うれしいひなまつり」であり、この楽曲にはB^b音が出てこないため、実質黒鍵を使用するのはE^b、A^bの2音である。また、調性なし(その他)と分類した「あえてよかった」の簡易伴奏譜においては、F[#]、G[#]、C[#]の3つの黒鍵が使用されるが、その使用頻度はG[#]は楽曲中1音、C[#]は2音のみである。

また旋律部分に臨時記号として黒鍵を使用する楽曲は、以下のとおりであった。

表4 『小学生のおんがく1指導書伴奏編』及び『小学生の音楽2指導書伴奏編』において旋律に臨時記号として黒鍵が含まれる楽曲³⁾

指導書	楽曲名	調性	使用される黒鍵
『小学生のおんがく1指導書伴奏編』	いぬのおまわりさん	ニ長調	G [#]
	しろくまのジェンカ	ヘ長調	F [#] 、G [#]
	さんぽ	ハ長調	A ^b
	おもちゃのチャチャチャ	ハ長調	G [#] 、A ^b
	もりのくまさん	ハ長調	F [#] 、D [#]
『小学生の音楽2指導書伴奏編』	うたえバンバン	ハ長調	F [#] 、A ^b
	手のひらをたように	ヘ長調	F [#]
	あえてよかった	調性なし	G [#] 、C [#]

このことにより、これら楽曲では黒鍵を使用する頻度が少ないであろうということがはっきりした。つまり、教員養成、保育者養成におけるピアノ初心者は、黒鍵に煩わされる頻度が少なく済むことが、これにより明らかである。

(2) リズムと拍子

一般のピアノ初心者用教本では、まず4分音符を基準とした拍子で、4分音符(休符)、2分音符(休符)、全音符(休符)などから学習を始める場合が多い。しかし8分音符(休符)がでてくると、とまどってしまう学習者が出てくる。そのような学習者にとって、8分音符(休符)が4分音符(休符)の半分の長さであるという理屈は、頭では理解できても演奏するのは難しいようである。

さらに付点4分音符と8分音符の組み合わせによるリズムも、8分音符に移行するタイミングがつかめず、つまづきやすい。

なお、幼稚園、保育園用の楽曲に大変多く使用されているリズムとして、付点8分音符と16分音符の組み合わせによるリズムがあげられる。

譜例1 『小学生のおんがく1 指導書伴奏編』より「ことりのうた」(p.9)

譜例1の「ことりのうた」は、まず付点8分音符と16分音符の組み合わせによるリズムで始まるが、その後8分音符が2つ連なったリズムが出てくる。これら2つのリズムパターンが混在した楽曲は、きちんと弾き分けられずに苦勞する学習者も多い。

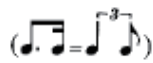
また、別の2つのリズムパターンが混在した楽曲として、譜例2をあげる。

譜例2 『小学生のおんがく1 指導書伴奏編』より「さんば」(pp.38-39)

付点8分音符と16分音符の組み合わせによるリズムは、3連符と混同されがちで、楽曲によってははっきりと区別するよう但し書きが付いている場合もある。

しかし、この「さんぽ」においては、楽曲の冒頭に次のような指示が掲載されている。

譜例3 『小学生のおんがく1指導書伴奏編』より「さんぽ」(pp.38-39)



これは、付点8分音符と16分音符の組み合わせによるリズムと、3連符を同等に扱うように指示されているものである。このような楽曲もあるが、基本はリズムパターンを区別して演奏できるように指導を行うべきであろう。

これら、ピアノ初心者にとって難しいと思われるリズムにおいては、手拍子、足拍子なども取り入れつつ、始めのうちは指導者が一緒に拍子をとるなど工夫をした指導が求められる。

次に、拍子については前述したように、4分音符を基準とした拍子、つまり4分の4拍子、4分の3拍子、4分の2拍子の楽曲が圧倒的に多いように思う。『小学生のおんがく1指導書伴奏編』及び『小学生の音楽2指導書伴奏編』において、拍子の分布は以下のようになった。

表5 『小学生のおんがく1指導書伴奏編』及び『小学生の音楽2指導書伴奏編』における拍子の分布

拍子	小学生のおんがく1指導書伴奏編	小学生の音楽2指導書伴奏編	合計曲数
4分の4拍子	18	14	32
4分の2拍子	17	15	32
4分の3拍子	4	4	8

これにより4分の3拍子の楽曲が少ないことと、8分音符基準の拍子の楽曲が1つも見当たらないことが明らかになった。

しかし8分の6拍子の楽曲として『小学生のおんがく1指導書伴奏編』において鑑賞資料として掲載されている「ミッキーマウスマーチ」、また幼稚園、保育園用の楽譜に掲載されている「思ひ出のアルバム」などがあげられるため、こちらの拍子も学習者は習得する必要がある。いずれにしても適切な拍子感を伴い、正確なリズムで弾き歌い奏ができるよう、指導者は指導をしていくべきであろう。

(3) コードネーム伴奏の段階を踏んだ指導

以上を踏まえ、本論文ではコードネーム伴奏法を種類別に考察し、レベル別に提案を行う。

①コードネームの根音のみでの伴奏

この方法は、例えばコードネームがCであれば、その和音構成音はCEGであるが、それをC音のみにして演奏するといった方法である。

この方法であれば、教員養成、保育者養成におけるピアノ初心者においても、いきなり全ての和音構成音を把握し、演奏する必要なく、演奏することが可能である。その際、まず、なるべく指のポジション移動が少ない楽曲を選択し、徐々に難易度を上げていくのが良い。ピアノ初心者

が抱きがちな、苦手意識を緩和することにつながるとされる。導入段階として、このプロセスは有意義なものではないであろうか。例として、譜例4をあげる。

譜例4 「こいのぼり」⁴⁾

やねより たかい こいのぼり

おおきい まごいは おとさ ん

ちいさい ひごいは こどもたち

おもしろ そうに およいで る

②基本形での伴奏

教員養成、保育者養成のピアノ初心者においては、和音を片手で同時に演奏すること、そしてそれが移動していくことは、大変困難を伴う。

本来、和音進行の観点から言えば、基本形のみの演奏は、例えば平行5度ができるなど、好ましくない。しかし、教員養成、保育者養成におけるピアノ初心者が、まずコードネームの基本形を把握し、実際に鍵盤に触れる経験をする事は、その先のレベルアップした伴奏形に対応するために必要であると考ええる。

しかしながらこの方法での伴奏は、実用性の観点から軽く触れる程度にし、学習者が理解をした時点で、次の段階に進んだ方が良いであろう。

③転回形を含めた伴奏

前述の第2段階を理解した学習者は、次に転回形を含めた伴奏法を学習、習得するのが良いであろう。ある和音から次の和音へと移動する際に、各声部はなるべく共通音、若しくは近い音への移行をした方が良い。そのため、指導者には指使いも含めた指導が求められる。

しかし、それぞれ違うポジションの和音を演奏するのは、ピアノ初心者にとっては困難なため、

楽曲の選択には慎重さが求められる。

そこでまず、コードネームの種類が少ない楽曲を選択、学習し、順を追って種類の多い楽曲へと移行していくのが良いのではないだろうか。コードネームの種類が少ない楽曲として、例えば主要三和音(V₇を含む)のみで成立している楽曲があげられよう。

『小学生のおんがく1指導書伴奏編』及び『小学生の音楽2指導書伴奏編』に掲載の楽曲においては、以下のものがあげられる。

表6 『小学生のおんがく1指導書伴奏編』掲載の主要三和音のみで構成されている楽曲
(全39曲中19曲)

楽曲	調性	コードネーム
ちょうちょう	ニ長調	D、A、A ₇
ちゅうりっぷ	ニ長調	D、D/A、A ₇
こいのぼり	ハ長調	C、C/G、F、G、G ₇
ぞうさんのさんぽ	ヘ長調	F、F/C、C、C ₇
てとてであいさつ	ハ長調	C、C/G、F、G
かたつむり	ハ長調	C、C/G、G ₇
うみ	ト長調	G、C、D ₇
ゆびあそびのうた	ハ長調	C、G ₇
どんぐりさんのおうち	ハ長調	C、C/G、G ₇
なかよし	ハ長調	C、F、G ₇
どれみでのぼろう	ハ長調	C、G
きらきらぼし	ヘ長調	F、B ^b 、C、C ₇
ひのまる	ヘ長調	F、B ^b 、C、C ₇
とんくるりんぱんくるりん	ハ長調	C、G ₇
こいぬのマーチ	ヘ長調	F、B、C ₇
たなばたさま	ヘ長調	F、B ^b 、C
おしょうがつ	ヘ長調	F、B ^b 、C、C ₇
うれしいひなまつり	ハ短調	Cm、Fm、G
もりのくまさん	ハ長調	C、F、G ₇

表7 『小学生の音楽2指導書伴奏編』掲載の主要三和音のみで構成されている楽曲
(全33曲中13曲)

楽曲	調性	コードネーム
はしの上で	ヘ長調	F、C、C ₇
たぬきのたいこ	ハ長調	C、F、G ₇
かっこう	ハ長調	C、G、G ₇
かえるのがっしょう	ヘ長調	F、C ₇
かぼちゃ	ハ長調	C、F、G、G ₇
虫のこえ	ハ長調	C、F、G
小ぎつね	ハ長調	C、F、G ₇
はるがきた	ハ長調	C、C/G、F、G ₇
夕日	ニ長調	D、G、A、A ₇
とんぼのめがね	ハ長調	C、F、G
シャボン玉	ハ長調	C、C/G、F、G
ロンドン橋	ハ長調	C、G ₇
はるのまきば	ハ長調	C、C/G、F、G ₇

そのうち「きらきらぼし」を譜例としてあげる。

譜例5 「きらきらぼし」⁵⁾

Chords: G7 C G C C F C G7 C

Lyrics: きらきら ひかる おそらの ほしよ まばたき しては みんなを みてる

Markings: Fine, D.S.

第5小節のG₇は、旋律部分にF音が使用されているため、左手をGコードの構成音にしている。指導者は、旋律部分にも配慮した指導を行うべきであろう。

④分散和音での伴奏

第3段階で習得したポジションを基にして、左手にアレンジを加えて演奏する。以下の伴奏形が基本例としてあげられよう。

譜例6 分散和音による伴奏形の例

またアルペジオ奏法では、三和音を音域を広げて演奏することにより、楽曲にさらに広がりをもたらすことが出来る。次にあげるのは、全体として分散和音で構成された伴奏譜である。

譜例7 「こぎつね」⁶⁾

Chords: C F C F C G7 C G7 C

Lyrics: こぎつね コン コン やまのな か やまのな か くさのみ つぶして おけしょう したり



第6小節のF音は和音構成音ではないが、経過音として使用した。また第13小節第2拍目は、楽曲がもうすぐ終わる部分であるので、GG音を使用している。

⑤曲想や歌詞に合わせた伴奏

以上、基本が習得できたら、右手旋律など、楽曲の曲想を考慮した伴奏形を考察する。旋律のみならず歌詞も考慮した伴奏付けであれば、なお良いのではないであろうか。

譜例8 「おむすびころりん」⁷⁾



第2小節目の「おじいさん」のシンコペーションのリズムを活かすために、左手も同様のリズムとした。また、第6小節目の歌詞「ころりん」のリズムに特徴があるため、左手で合いの手を入れるようなリズムにしている。Dmコードを付け加えることにより、より幅広い表現ができるよう工夫した。

以上のように指導者は、既成の楽譜に則った伴奏形にこだわらず、個々の楽曲の曲想に応じて、適切な伴奏形を指示したり、また、学習者に何パターンか演奏させ、比較して考えさせるといった指導も考えられよう。

(4) 指導法の考察

その他、これら楽曲を指導するにあたり、基礎段階で注意すべき点として以下の3点があげられよう。

①音名を書かせない。②指使いを固定させる。③歌唱がおろそかにならないようにする。

すべての音に音名を書いてしまうと、音符ではなく文字を読みながら演奏してしまうため、いつまでも楽譜が読めないことになりかねない。さらに、音の高さもあいまいになるといった欠点もあげられる。また、指使いを固定しないと、毎回違う指で演奏することになり、そのため楽曲が演奏できるようになるのに、通常より時間がかかってしまう。さらに歌唱がおろそかになると、本来の弾き歌いの意図が失われかねない。歌詞の間違いにも注意を払うべきである。

これら基礎的な項目ができるようになって、初めて曲想に沿った演奏ができよう。基礎の段階を習得した後は、前述の(3)コードネーム伴奏の段階を踏んだ指導のように、少しずつ応用を加えながら、臨機応変に対応していくのが良いのではないだろうか。

4. まとめ

本論文では、小学校低学年の音楽教材が、幼稚園や保育所でも多く扱われることから、音楽教育における幼小連携を教材研究レベルで検討した。そしてその過程で、初心者向けに段階的なコードネームによる簡易伴奏を提案し、それぞれについて指導法のポイントについて考察を加えた。

このように教材の詳細を検討し、小学校や幼稚園教諭(および保育士)を目指す学生(特に本論文では初心者)のために、その個々人の能力に応じてピアノ伴奏を開発することは極めて重要であると思われる。このように小さくもあるが、丁寧な作業の積み重ねが、音楽教育における本当の意味での幼小連携を実現するための一助となると考えられよう。

なお最後に、簡易伴奏について触れておきたい。簡易伴奏譜は、教員養成、保育者養成におけるピアノ初心者にとって、導入には適していると思われる。そして本論文で提案したように、コードネーム伴奏も混ぜながら総合的な指導を試みていくことも有用であろう。しかし、もちろん簡易伴奏は、あくまでも簡易なものにすぎず、本格伴奏による音楽指導が望ましいことは言うまでもない。本格伴奏には、さまざまな和音やリズム、そして副旋律など多くの音楽要素が含まれており、その伴奏に合わせて音楽活動する子どもは、伴奏から多くの音楽的成長の機会を得られていることであろう。筆者は本論文において、幼小連携を考察するために簡易伴奏の提案を中心的に行ったが、子どもの音楽的成長を保障するためには、やはり本格伴奏が望ましいと考えている。つまり、本論文で提案した簡易伴奏の延長線上には、本格伴奏による音楽指導を展望していることを付記しておきたい。

注

- 1) 『小学生のおんがく1指導書伴奏編』教育芸術社、及び『小学生の音楽2指導書伴奏編』教育芸術社、2011年。伴奏譜として掲載されているもののみである。鑑賞資料、参考曲、君が代は除く。
- 2) 移調譜は除いた。また、歌唱用伴奏譜と器楽用伴奏譜が併記されている場合は、歌唱用伴奏譜を採用した。
- 3) 臨時記号使用の結果、白鍵になる場合は、除外した。
- 4) この楽曲は『小学生のおんがく1指導書伴奏編』に掲載されている。譜例は筆者(佐藤)による。強弱記号は省略した。
- 5) 同上。前奏は『小学生のおんがく1指導書伴奏編』に則った。2番の歌詞は省略した。
- 6) この楽曲は『小学生の音楽2指導書伴奏編』に掲載されている。譜例は筆者(佐藤)による。強弱記号、2番以降の歌詞は省略した。
- 7) この楽曲は『小学生のおんがく1指導書伴奏編』に掲載されている。譜例は筆者(佐藤)による。2番以降の歌詞は省略した。また、Dmコードは筆者(佐藤)が付け加えている。

参考文献

論文

- 池之内ひろみ「保育士・幼稚園・小学校教員養成における「弾き歌い伴奏法」についての一考察」『白鳳女子短期大学紀要』第9巻、白鳳女子短期大学、2014年、pp.19-28
- 小笠原真也「ピアノ初心者に対する効果的な伴奏法指導－教育実習に役立つ実際の指導のための一考察－」『広島文化短期大学紀要』第40巻、広島文化学園大学、2007年、pp.33-46
- 成川ひとみ「小学校の歌唱指導で活かせる簡易伴奏法の研究－I～鍵盤和声の基礎的な技能で出来ること～」『山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』第41号、山口大学教育学部附属教育実践総合センター、2016年3月、pp.85-94
- 三村真弓 他「幼・小連携の音楽カリキュラム開発の基礎的研究(I)－幼児・児童のピッチマッチング能力に着目して－」『広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要』第36号、広島大学、2008年、pp.95-100
- 三村真弓 他「幼・小連携の音楽カリキュラム開発の基礎的研究(2)－斉唱時における子どもの歌唱実態に着目して－」『広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要』第37号、広島大学、2009年、pp.145-150
- 三村真弓 他「幼・小連携の音楽カリキュラム開発の基礎的研究(3)－斉唱時における子どもの歌唱能力の発達に着目して－」『広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要』第38号、広島大学、2010年、pp.87-92

資料

- 文部科学省「幼児教育と小学校教育の連携・接続について」『中央教育審議会初等教育分委会幼児教育部会』(第14回:2004年5月31日)議事録・配布資料

楽譜

- 財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構編『母とおさなごの歌』全音楽譜出版社、2008年
- 鈴木恵津子、富田英也監修、編著『改訂ポケットいっぱいのおうた 実践子どものうた簡単に弾ける144選』教育芸術社、2011年
- 『小学生のおんがく1指導書伴奏編』教育芸術社、2011年
- 『小学生の音楽2指導書伴奏編』教育芸術社、2011年